

黒土に生きる



作
日比野フク子



「黒土に生きる」

日比野 フク子

一 女ざかりを湯ノ里に来て

汗にまみれて鋤をとる
夢と希望を心に抱いて
この身一ツを支えつつ
やるぞ命のあるかぎり

二 見栄もいらなきあおせ

じも知らぬ
育つ子供に頼りつつ
耕す黒土願いをこめて
蒔けば明日にも花が咲く
明日の天気をまた祈る

三 口じや言えない幾年月を

農婦一代生きてきた
人の情にもろ手を合わせ
共に達者で生きようと
かくす涙の人生を
かくす涙の人生を

岩手県の小作農家に生まれ育ち、戦中姉の嫁ぎ先蘭越町湯里の地に、まだ見ぬ北海道を夢見て嫁いで来ました。夫より馬に触れ馴染む事から教えられ、畑を馬耕するまでとなりました。その頃は辛さよりも嬉しさに変わり、三人の子の親として、夫と共に春の蒔き付けに夢をかけ、秋の収穫に期待して働いていた時の事を記したものです。

昭和二十五年二月二十五日 作

人生双六日記

日比野 フク子

一

生れた時から 貧しくて
十四の歳に 母が逝き
みんな去り行く夢又夢の
淋しく悲しくすすり泣き
亡き母愛し 母恋し

二

時の流れわ うつれども
心の痛手は つぐなへず
此の世の幸福もとめつつ
蝦夷地の姉を訪ね来て
見知らぬ人と 縁となる

三

なれぬ農業 一筋に
十人家族も ままならず
冬はあか切れ 乳しぼり
床に付くのわ十二時と
目覚めた時には四時を指す

四

姑娘のひそひそ語らいに
嫁の甘へる すきも無く
見てわ見ぬふり聞かぬふり
いぢけちやだめよと胸におき
夫は知つても知らぬふり

五

上りの汽車の警笛を
聞く度故郷の恋しくて
ふたたび帰りもどりたい
幸せうすい 運命よと
一人枕をぬらす夜

六

親の心も 知らずして
腕白ざかりをすくすくと
三男の寝顔もいじらしい
せめて此の子の倖せと
今日も汗して生きてきた

七

時おりクラス会の便り受け
胸にいだきし 故郷の
あの山あの川あの友の
幼き頃の 面影を
かずかず遠く偲ばれる

八

逢えば楽しい クラス会
それぞれ歩みて 六十路
喜怒哀樂の顔と顔
遠い昔を 語り合ひ
只 懐かしい友よ友

九

好いて好かれた仲では無いが
逢えば別れがおしくなり
名残つきせぬ今宵の宿に
せめてもう一夜の客となり
過ぎせるものなら過ぎしたい

十

まゝにならない憂世の常に
思い出胸に だきしめて
次回又ねと 口々に
あゝ故郷の友さらば
又も逢いましよ 岩手の故郷で

年月が流れ、北の氣候の変化に、身も心
も湯里になじみ、諸々の苦難の道のりも家
族に支えられ、時には無情に故郷が恋しく
なり、幾度と無く涙した事でした。何年間

かに一度帰郷出来る事に喜びを隠せなかつたものでした。又、クラス会の案内を頂き、そこへ出席できる喜びを隠せず、汽車に夢を乗せ、友との再会に童心の思いでした。道はそれぞれ違うけれど、年を重ねてきた同士との別れを惜しみつつ帰町、又湯里で頑張ることの力を心に嬉しく、懐かしさのあまり思い出を記したものです。

昭和六十三年 作

短歌

ああ故郷

日比野 フク子

・ 生きる世は明日の日をば見えずとも

朝の目覚めて今日の一步を

・ 新幹線故郷の地を往き来する

昔荒地を汗した上を

・ 米魚配給制度布地までも

もんぺ姿の青春思わる

・ 「あゝ故郷」唄うCD寢床にて

啄木の短歌くり返し聞く

・ 路を手にし孫はばあちゃん作つてと

小さい春を受けて幸せ

蘭越よいとこ（單律節の替歌）

一、蘭越よいとこ一度はおいで

（ドッコイシヨ）

花の香りにコーリヤ蝶も来るよ

（チヨイナチヨイナ）

二、右に羊蹄左はニセコ

（ドッコイシヨ）

清く流れるコーリヤ尻別川よ

（チヨイナチヨイナ）

三、米のなどころそよ吹く風に

（ドッコイシヨ）

秋は黄金のコーリヤ穂がなびくよ

（チヨイナチヨイナ）

四、昆布湯ノ町もみじの山よ

（ドッコイシヨ）

まねく湯煙コーリヤ声がするよ

（チヨイナチヨイナ）

五、滑るスキーにネオンが照らす

（ドッコイシヨ）

思い出すのはコーリヤ湯の宿によ

（チヨイナチヨイナ）

見たままの景色、感じたままの気持ち。色とりどりの花が咲き誇る花壇には、生き物たちが戯れる。右を見れば羊蹄山、左を見ればニセコ連山。そこを流れる尻別川のはどりに広がる田園風景。秋には日本一おいしいお米を育み、北海道を代表する温泉地でスキーを滑って温泉へ。自然豊かな、たくさんの恵みを与えてくれるこの地に暮らす私たち。今当たり前におきている日常はすばらしい幸せだということを再確認し、心其のままに作りました。

平成二十五年 作

「出会い、そして支えられて」

近年デイサービスセンターのお世話を受けて楽しい日を暮しております。同じ日の利用者さんと親しい仲となり、昔の話に花を咲かせ語らい、又午後のゲームでの笑いやあり、あつという間の一日を過ごさせていただいております。とある十月、自分の気の緩みから外出時つまづいてしまい、腰を痛め四力月の入院生活となりました。辛い日々でしたが歩けるようになり、二月に退院となり身体も心も少しずつ気楽になり、四月から又デイサービスセンターのお世話を受けることになりました。久しぶりに友と再会することを楽しみにしながらデイサービスへ出かけ、運転手さんからの明るい「お早う御座います」の言葉。そしてセンターでの仲間同志との再会に、逢えて良かったと実感しました。他の皆さんから「待ってたのよ」と声をかけられ、共に笑顔があふれました。その時センターの看護師さんから、「お友達から帰ってきたら私に渡してください」と預かっていたものがあると聞かされました。それは大人の塗り絵という本でした。そのお友達は、私の入院中に外の病院へ入院されたことを聞かされ、とても淋しい思いになりました。手渡された本のページをめくって見た所、あ



まりにも繊細で美しい絵。四季の花々や飛び交う蝶やトンボ、小鳥、虫や蜜蜂が花と戯れている、生きているかのような絵に、「エッ!」、「なぜ」、「私に塗れるはず無いのに」とためらいました。しかし私を慕い、いつも快く話をしてくださったお友達なのだからと心にとめ、自信は無いけれどその先輩の方の心を受けとめ、書いてみよう看護師さんの手より受け取りた。出来ないながらもお手本を見て魂を吹き込んでみようと書いてみました。一枚二枚と絵を完成させていくうちに、なぜかしら幸と感動を覚え、現在も生きがいとして書き続けております。

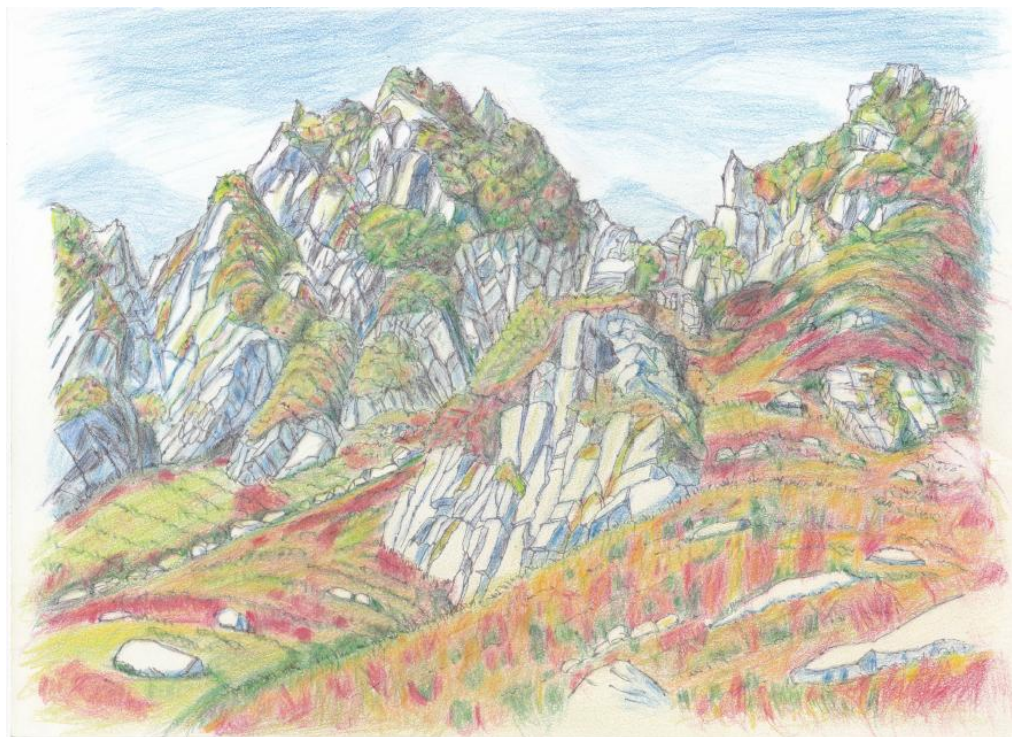
デイサービスに出かけ、あの心温かい先輩の方との出会いが無ければ、この塗り絵との出会いも無かつたことでしよう。塗り絵の事や様々な出来事も、周りの皆様たちに支えられながら楽しい老いの路を歩んでおります。

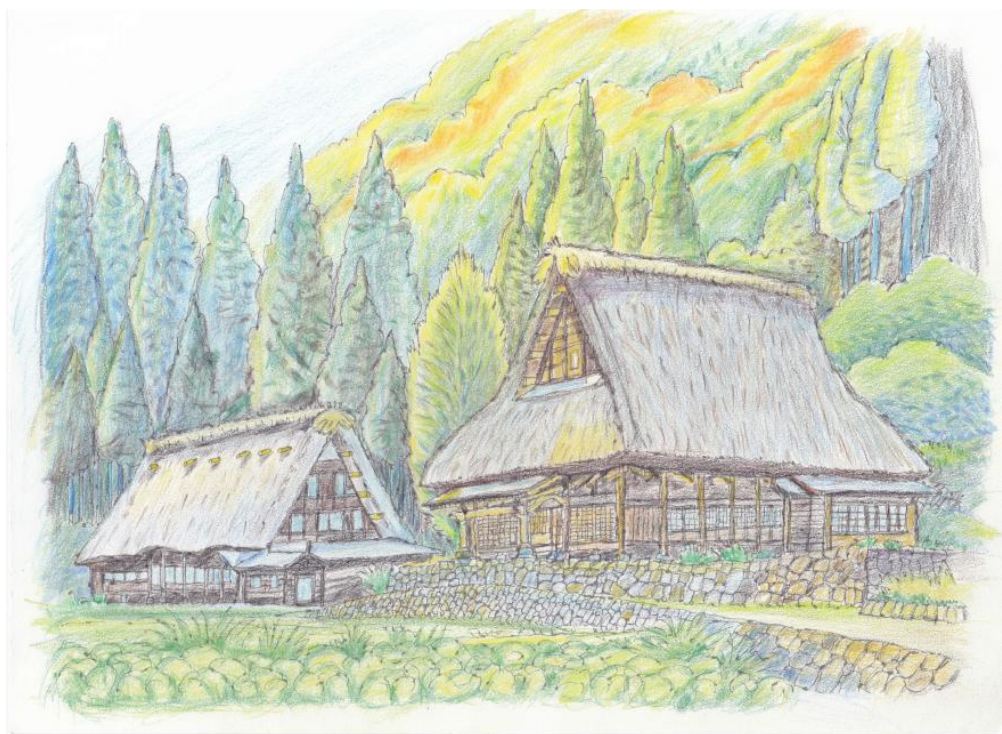
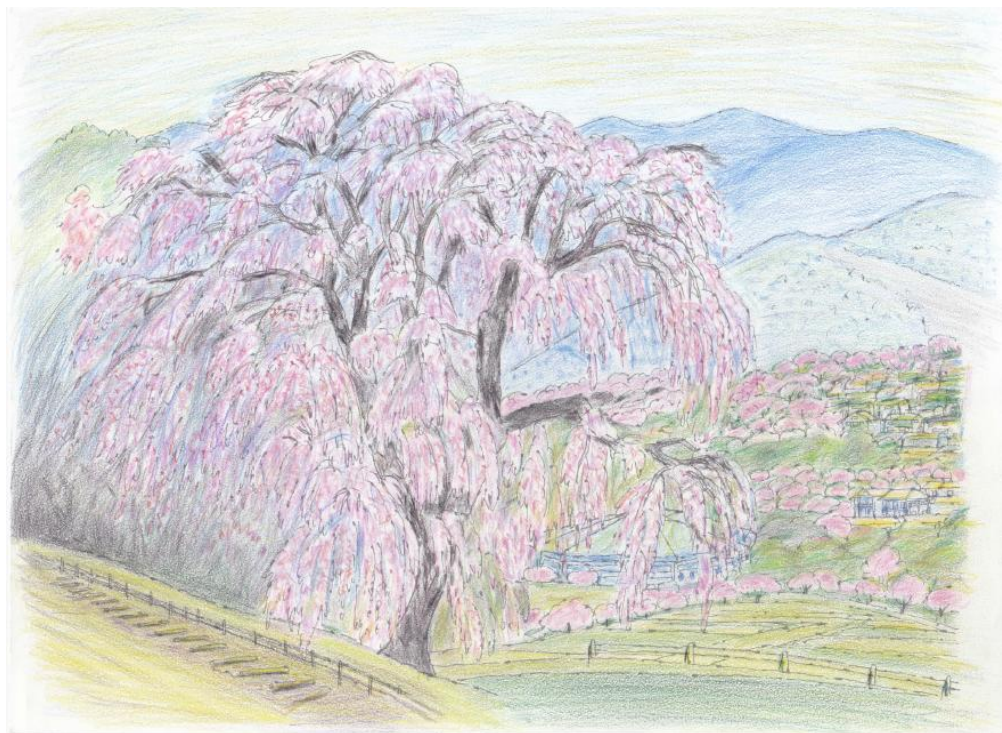
今の私の気持ちです…

介護師の 笑顔で交わす言の葉に

此の上は無しと 老いて尚知る







黒土に生きる

2014年3月1日 発行

著 者 日比野 フク子

発行者 日比野 フク子

出版 らんこし作家デビュー・プロジェクト

© Fukuko Hibino 2014

